ず い そ う

「ストックホルムの水」

Stockholm Water

— 第9回国際水質汚濁
研究会議に出席して —

by Akira Kudo, ph D. P. Eng.
Research officer,
National Research Council,
Visiting Professor, Ottawa Canada.

カナダ国立科学研究所・主任研究官
オタワ大学・客員教授

工学博士 工 藤 章

第9回国際水質汚濁研究会議は、本年6月スウェーデンの首都ストックホルムで盛大に開催された。参加35カ国から1,000名近くの学者・技術者が集まり、水質汚濁およびその技術開発に関して、最新の研究成果が公開され、活発な討論がなされた。日本からも3編の招待論文が発表され、各国の注目を浴びた。水銀・カドミウム汚染で有名な日本は、当然のこととしてその最新の除染技術に対しても、世界の強い関心を集めている。

会場として、きれいな湖水に囲まれたスウェーデン旧国会議事堂が使われ、改めて水そのものが作り出す（ドブ水では出来ない）環境の美しさ、静かさ、豊かさを示してくれた。大都会、しかも交通マヒすらあるストックホルム市街のド真中で、子供達が釣り竿を手に「ウキ」の動きをじっとみつめている姿はうらやましい。自然と人間の対話。自然の静かさ、美しさ、そして恵み。これは、教科書では教えられない。河海の水をきれいにするしかない。

開会式は、古い伝統を誇る市のコンサートホール。満員の会場をスウェーデン放送局オーケストラが奏でるラプソディが魅了する。スウェーデン国王カール16世のメッセージに続き、フォルデン首相の開会演説によって、会議は開会された。スウェーデン首相は、「水質汚濁防止の研究が我々人間社会に与える重要性」、「スウェーデンの環境汚染に対する真剣な取組み方」の2点を、自信をもって強調した。最近、世界各国で「環境汚濁防止に対する投資は、経済活動を停滞させ人間社会にマイナスである」と言っている風潮の中でスウェーデン首相のこの発言は、我々を勇気づけた。首相のこの演説は、ただ単にお題目を並べ、その場その場を「ソツ」なく切り抜ければ良いと言う政治家の発言ではなく、実質的裏付けのある発言だけに、その意味する所は大きい。事実、10年前のスウェーデンは日本と肩を並べる汚染国で、特に水銀については、死亡者が出なかったことの方が不思議なくらいの「ヨゴレ」方であった。易きに流されぬ学者が、スウェーデンにもいたことが、死亡者ゼロの一つの理由であろうか？ 其後スウェーデンは、全国力を投入して環境を浄化している。しかも、世界最高の生活水準を維持しつつ……。

環境汚濁が社会の強い注目を浴びてから早や10年。'

この間確かに進歩はあった。環境悪化は日本でも喰い止められ、少しずつ改善の「キザシ」すら見え始めている。しかしそのテンポは遅い。何故であろうか？東京の隅田川一つくらい何故きれいに出来ないのであろうか？日本の国力・水質汚濁防止技術・それにこれを支える研究者・技術者の層／＼どの条件を考えてもスウェーデンよりも日本のほうが優位だ。さらに形而上的に言っても、自然に親しみ、自然を愛する心は、日本人の本性ではなかったろうか？川端康成氏が、ノーベル賞受賞講演の時、このストックホルムで強調された様に……。

隔年毎に、隅田川と瀬田川とで「東大ー京大ボート競漕」が行なわれていた。これは、昔の一高三三高戦の名残りで、もう70年以上も続いているボート界伝統の一戦だ。筆者もカレコレ20年前、京大クルーの一員としてオールが作る水しぶきに若い血を躍らせた。今でもよく覚えているが、当時の東大クルーが瀬田川にやって来て、その水の清らかさに驚き「こんな川ならもっと練習もしただろうに……」と、何でも当時の隅田川は「ドブ川」で、「オールをさわるのもいやだ」と聞いた。そして、その2・3年後からは隅田川での競漕は中止になり、都心を離れた水でこの伝統の一戦は続けられることになった。考えてみれば我々ボート

を漕ぎ、河川に一番親しんだ筈の人間にすら、「場所を移さず、何故隅田川をきれいに出来ないのか？」の基本的な疑問は湧かなかった。隅田川に対する愛着、隅田川の持つ情緒、隅田川放棄に対する感傷的な声は何一つ聞かれなかった。当時の都知事はボートで有名な東龍太郎氏。政治的・経済的・技術的、その他あらゆる条件は揃っていた。ただ自然に対する日本人の感情、情緒を忘れたことを除いては……。しかも恩師の岩井重久先生が、第2回の国際水質汚濁研究会議を全力を尽して東京に招致され、大成功をおさめられたのに。

学会の夜のパーティは、ノーベル賞授与式が行なわれる大広間で開かれた。「現在世界中で、泳げる水がある首都は何カ国あるか？」に話の花が咲いた。日本で生れ、日本で育った筆者に「カナダのオタワ」の他「日本の東京」が言えなかったのは悲しい。

春のうらの隅田川

上り下りの舟人が

権のしずくも花と散る

眺めを何にたとうべし。

この歌を日本人が想い出し、そして子供達が再び唄えるまで、あと何年の歳月が必要であろうか？

(ストックホルムにおいて)。